

2008年11月4日(火)

## 坂東玉三郎 下関特別公演情報

な匂いが広がりました。

別に私は環境問題をテーマにしている役者ではなく、スイカにつられて山鹿へ向かったのでもありませんが(笑)、一回性の生命の中で現場に身をおいて物

を考えると、そこから色合いとか感情を紡ぎだして舞台に乗せて、お客さまに何かを受け取っていただきたいのです。下関では、おいしいフグも待っているし、関門海峡の波打ち際に建つ水族館の「海響館」を訪ねれば海の「仲間たち」と出会える。何より、熱心な歌舞伎ファン

の方々との再会できるのがうれしです。やはり、人とのつながりが行動を起こす一番のエネルギーになります。下関は、実をいうと本来、出不精な私が一年に一回は出かけた土地になってしまいました(笑)。

「しつとりしたものをじつくりと醸していたください」

5月21日午後、下関市赤間町の東京第一ホテル下関で行なわれた11月4日特別公演の製作発表記者会見で、坂東玉三郎さんは、気品に満ちた滑らかな口調で語った。画面越しよりさらなる二枚目の登場は、会場には静寂と華やきとが同居していた。日頃、雄弁闊達であるメディア各社の記者たちも、なかなか質問の口火を切らずにいたのは、華やきに息を飲むばかりだったからにちがいない。それをほくしたのが同公演実行委員長、原和人さんの誠意あふれ

るあいさつであり、同委員の一人、升本猛さんのけれん味のない司会だった。

坂東玉三郎さんは、もはや通いなれつつある下関の魅惑にふれる一方で、ひたすら舞踏そのものに思いを込めていることを強調した。そして「宮」は女が冬の夜にはかなく、「菜の上」は紙船に狂う女が激しく、「鐘ヶ餅」は桜の下で理想の恋に遊ぶ女がひたひたと舞うのだと概略を述べた。

海峡の街が色づき始める季節にゆかしく調和した三様の舞いが、一日千秋の思いで待たれる。

日時/2008年11月4日(火)  
午後3時開演(開演は午後2時)  
会場/下関市民会館 大ホール(下関市竹崎町4-5-1)  
演目/『雲』『菜の上』『鐘ヶ餅』  
三絃→富山清琴 琴→富山清仁  
料金/特別座17,000円 S席13,000円  
A席9,000円 B席6,000円  
制作/松竹  
主催/問合せ/坂東玉三郎特別公演下関市実行委員会  
☎083・222・5674  
共催/下関市文化振興財団  
後援/山口県・下関市・下関市教育委員会



によって、ある印象が伝わるのです。絵であれば、二次元の白いキャンバスに彩色することによって、はらかな海や山や太陽が感じられる。キャンバスが肉体なら、稽古してきたことが彩色にあたるでしょうか。

先日、下関公演の実行委員の一人で画家の升本猛さんが、私のダイビング姿をモチーフに「水底の輪舞」というすばらしい絵を描いてくださいました。いつも故郷下関の海や港などを描かれています。そこでくっきりと下関の海辺が感じられるのは、升本さんがキャンバスに心で絵具を動かしているからでしょう。

美を求める人間の魂は残っても、銀河系宇宙の果てに私自身の芸が残るという確証はありません。ただ、残らないとあきらめて生きていくのは苦しいことだし、ひょっとしたら残るかもしれない、未来の誰かを受け取ってくれるかもしれないと折って、前向きな姿勢で生きていくのがいいだと考えています。

日々を真剣に生きて、気がついたら人生の終局を迎えていた。それで充分です。あるいはその前に、睡れなくなるかもしれ



れない。そうになったら、残った時間を活々と生きていくだけです。

## 熱心な歌舞伎ファンとの 再会を楽しむに

自然は私に、いろいろなイメージを提示してくれます。もちろん自分も、自然の一部です。そんな自然と身近に触れながら舞台のことを考えられるのが、地方公演の醍醐味です。

たとえば熊本県山鹿の八千代座には20年近く通い続けていますけれども、お声のかかった頃はちょうど自然破壊が叫ばれて、加工品が出回り、日本古来の食や食文化がすたれかけた頃でしたから、心が地方に向いていたように思います。現地へ下見にうかがうことも決まった夏のある日、東京の楽屋に山鹿から大きなスイカが1ダースも届きました。皆で割ると、たちまち楽屋いっぱいになり、幼い頃に海辺でスイカ割りをして食べたあの素朴